

第1回：始めに

－ 歴史的に見ると、我々がこの地球という惑星の生命システムや生物多様性を救うということに目を向け本気で取り組み始めたのはごく最近のことである………すべての人々の偉大な成功を祈っている。それよりほかに、もはや取り得る道はないのだから。

（ビル・モリソン「パーマカルチャー」日本語版への序文より）－

21世紀に向けての最大の課題の一つは「環境問題」である。特に自然環境や農業に関係する問題について考えてみた場合、生物多様性の保全、自然と人間との共生、資源循環型社会、環境保全型農業、有機農業、都市と農村を結ぶ試み……等々、キーワードとなるような言葉はいくつかあげられる。「田舎暮らし」や中高年者の「新規就農」、「農的生活」という言葉も新聞や雑誌でよく見かける。しかし、「農業」や「田舎暮らし」がそれほど簡単なものではないことも厳然とした事実である。だからこそ、有機農業から化学農業への転換、農業人口の減少、都市への人口集中等々が過去に日本で起こり、そしてそれは途上国でも同じで、現在起こりつつある。

「農的生活」の提唱者・大塚勝夫氏が説くように、全員が100%の農業、農的生活をめざす必要はないし、不可能である。とりあえず1%でもいいから、自然や農業に触れるような時間や機会を作り出す、そしてできればそれを次第に増やしていく。各自ができる範囲で、できることから始める。その積み重ねの中からは物事は変わっていかないのかもしれない。また、「農的生活」という言葉を考える時に同時に思うことは、農業は国際競争をしなければいけないのか？、とか「農業と環境と開発の関係」ということである。いうまでもなく、日本の水田維持は特に中山間地の国土保全と密接な関わりがあり、単純に米の価格という「経済性」だけでは判断できない。日本の米を国際競争という観点だけから見ると、結果としてより農業が衰退し、それとともに環境破壊が進む、つまり森も田も畑も荒廃していくおそれが多分にある。「真の豊かさ」論とも関連があるが、貨幣経済からの脱却、自給自足、穏やかな鎖国、WTOシステムからの離脱、といった「離脱の戦略」が生き残りのための有力な手段の一つかもしれない。そしてこれはもちろん日本だけの話ではなく、商品作物の栽培等の形で世界経済の中に取り込まれている多くの途上国の農民にとっても当てはまることである。

さらに、「都市化と過疎化の問題」も重要なテーマの一つである。物質的な豊かさの追求や労働としての農業を嫌う、といったことだけではなく、地方の過疎化の原因はさまざまであろう。その一つに、「隣組」などの近所つき合いのわずらわしさや、常に見られているような息詰まり感等の「田舎」ゆえの住みにくい現実もあるだろう。しかし、都会人で田舎にあこがれている人は結構多い。「週末村民」のように、村に定住しなくても村民になることはできないだろうか、という人もいる。もちろん、もっと積極的に田舎で農業をしたいという人もいる。こうした人たちと農村をつなぐための、「都市と農村との交流」も重要であろう。

このシリーズでは、人間と自然との共生をめざすいくつかの国内あるいは海外の事例を取り上げ、文献資料だけでなく、実際に取材あるいは調査に出かけてレポートする。そして、それらの持つ意味や課題、さらには途上国との関連までも考えていきたい。ここで紹介する事例は、必ずしもそれが代表的なものであるとか、非常にうまくいっているというものばかりではない。それはたまたま我々のアンテナに引っかかった、というだけでしかないかもしれない。しかし、ある意味で、すべてはそんな偶然な出会い、あるいは「縁」から始まるものではないだろうか？ 知り合わなければ何も始まらないのだから……

－ 自然と人間の共生関係を大切に、農業を中心に置き、農的生活を志向する産業社会、私はそこに新しい未来を予測する。そのような農的共生社会の創造が不可能ならば、人類は死滅の危機に瀕するであろう………。

（大塚勝夫「共生時代のエコノミー」序にかえてより）－